Carlos Quirino: philippine Cartography, Manila, 1959

室賀信夫

フィリピンはマゼランが死んだところである。この世界周航者は、未知の太平洋を東からここに達して、コロンブスとアルブケルケのあいだの地理的空白をうずめた。それ以後この群島は、一四九四年のトルデシラス条約で世界を両分したスペイン・ポルトガルの二大植民帝国の、地球の裏側における接点となる。セネカがうたつた「世界をめぐる海神(オケアノス)の輪」がイベリアの冒険的な航海者の手で結ばれたのは、ほかならぬこのフィリピンにおいてだつたのである。

だから、これまでフィリピン古地図の研究が、多くは近世における global な地理的世界像の成立という視野のなかで取りあげられてきたことは、むしろ当然だつた。だがその反面、東南アジアのこの重要な群島の地図史をそれ自身系統的に叙述しようとする試みには、ほとんど接しえないうらみがあつた。わずかに、そのようなものとしては、今から半世紀も前に発表された Dr. Pardo de Tavera の地図目録につけた論文があつただけである。

フィリピン歴代大統領の伝記作者として知られている Carlos Quirino 氏の、この豪華な装いをこらした著書は、だからフィリピン地図史の最初の総括的な概説だということができる。フィリピン史学会紀要の紹介によると、キリノ氏は大英博物館とアメリカ国会図書館につぐ大きなフィリピン地図のコレクションの持ちぬしだという。それに加えて著者が多年したしく欧米を歴訪して蒐集した豊富な資料が、この注目すべき労作を生んだのである。

いつたい現存するフィリピンの地図は、ほとんどすべてが西洋人によつて作られている。これは日本や中国の場合とたいへん違うところで、フィリピン地図史を直接西洋のそれへ結びつける。というよりも、見方によつては、それのローカルな表現だということにさえなるだろう。著者のこの問題への接近が、スペインやアメリカの群島開発にともなう地理的知見の進展という角度からなされているのは、だからこの場合もつとも正統的なやり方であるとしなければなるまい。

もつとも本書は、西洋人以外に、中国人や日本人のためにもそれぞれ一章を割いている。そして著者がトレミーにあらわれる Barussae や Maniolae をフィリピンにあてる説を否定し、群島をはじめて地図上に表現したのは中国人だつたと説いているのは、まつたく正しい。しかしベルリン自由大学の Dr. Fuchs の説にしたがつて、それが元の朱思本の図までさかのぼれるというのは誤りだと思う。羅洪先の広輿図に引かれた朱氏の自序に、漲海の東南、沙漠の西北の遠方の諸蕃は記載しないと、はつきり述べられているからである。実をいうと、この書の中国の部分はフックス氏と私が、また日本の章はおもに私が、著者の質問に応じて資料を提供したのだが、中国の場合は二人の協力者の意見がわかれたので、すこし叙述の混乱したところもある。日本の方は初期の世界図屏風や朱印船航海図を主にしているのだが、そのほかに、主題とあまり関係のない仏教

系世界図のことが大きく扱われたり、その他二三の誤りが見出されるのは、周到な答を怠った私にも責任があるわけで、これは著者にも深くお詫びしなければならない。

だがヨーロッパ人の探検と開発の問題になると、著者は該博な知識を発揮する。まず前半の各章の主題となっているのは群島の世界図上へのデビューの問題で、黒い肌のカリプソに抱かれて文明から逃避したマゼランの親友 Francisco Serrão がすでに一五一一年にミンダナオ島に足跡を印していたという Cortezão 教授の説を支持して、マゼラン以前のポルトガル人の群島に関する知見を語り、さらに一五二一年のマゼランによるフィリピンの「発見」から、一五七一年のレガスピのマニラ建設にいたる数次のスペイン探検隊の成果と、その地図化について述べる。そのなかで、ちょっと私の気にかかったのは、ルソン島の成形の問題である。いったいスペイン系の資料による地図では、探検の経過にともなって、はじめはまず群島の中南部だけが描かれ、北のルソン島がそれとわかる形になって現われるのは、ずっとおくれて一五九〇年の Bartholomeu Lasso の海図あたりからである。これを直接資料としたのが一五九二年版の Plancius の世界図なのだが、著者はこの重要な問題についてプランシウスにふれながら、初期スペイン系の知識を示すものとして注目をあびたラソの図にまったく言及していないのは、どうしたことだろうか。

ついで著者の目は、世界図から離れて、独立したフィリピン図に向けられる。ここにはおびただしい作品があるが、そのなかでもっとも古いのは Petrus Kaerius の袖珍版アトラス（一五九八）だという。しかし群島地図の代表的なものといえば、耶蘇会士 Murillo Velarde が一七三四年にフィリップ五世の命でつくった銅版のフィリピン地図帳で、著者もこの図のために一章をたてて、多くのページを割いている。読んでたのしい思いをするのは、ムリロ師がフィリピン人を愛してスペインの虐政に反対したヒューマニストであったこと、この図のさしえを描いた画工も、銅版を彫り印刷をした者もみなタガログ人で、りっぱな技術を示してムリロ師の期待に答えたことである。フィリピンでも、地図作製に耶蘇会士のはたした役割はそれ自体重要な研究テーマであるが、こののち一九〇〇年に出版された Algue 師の地図帳にもフィリピン人が協力していることを思うと、この神父たちの地図作製の事業は、土着民の参與という点でも興味ある問題をひめているように思われる。

なお著者がフィリピンで発見された最古の地図として挙げている一五七二年のネグロス島図は、とくに私の注意をひいた。これは Povedano map と呼ばれ、この島で土人二千人の住む荘園 encomienda を与えられたコンキスタドールのポヴェダノが描いたものだといわれる。島の山や川、森や集落をユーモラスな筆致でかいた見取り図である。エンコミエンダはスペインの新大陸植民地に起源をもつ制度で、それがフィリピンにも輸入されたのだが、著書がこの図のほかには、ほとんどこれに言及していないのは、群島の社会経済史の重要な資料となるべきこの種の荘園図の、多く現存するものがないためだろうか。

終章では十八世紀末から二十世紀のはじめにいたる複雑な国際関係を背景に、スペイン・イギリス・アメリカなどの測量調査事業を

記して一応叙述の筆をとめるが、そのあとに、古地図にあらわれた島々の古名を、簡単な解説をつけて表示しているのはたいへん便利である。そして最後に、一三二〇年から一八八八年までのフィリピン地図目録がのせられている。これは細かい活字で六〇ページをこえる詳細なもので、なかには前述したラソの図のような見落しもないではないが、まずほとんど群島に関するすべての地図類を網羅しているといつていい。解説も要を得ていて、この目録だけでも本書はじゆうぶんにその存在理由を主張することができるだろう。古地図の研究にはどうしてもすぐれた書誌学的な仕事が必要で、ことにフィリピンのような未開拓の領域では、これは何よりも望まれる基礎作業なのである。

というのも、フィリピン地図史の研究は、キリノ氏のこのりつぱな業績を踏石として、さらに大きな前進が期待されるからだ。著者はここでは群島の地図作製の編年的素描を試みたわけだが、こうした chronology をいつそう完成させていくとともに、他方では、そこに表現された群島の図形的進化を分析し、それを系統づけて適切な類別を行なうこと、つまりいわばこれらの地図の morphology が次の課題となるだろう。それによつてはじめて、このおびただしい地図的作品は相互に関連づけられ、そこから新しい意味を語りかけてくることになるのだから。

ついでに、すこし無理かも知れない注文をつければ、フィリピン地図史の特殊な事情はみとめるとしても、やはり、こうした著作のなかで、この群島のあるじであるフィリピン人自身の作品にふれることができないのは、さびしい思いがする。すぐれた技能をもち、しきりに交易を営んだフィリピン人が、自分たちの郷土の地図をもつていなかつたとは考えられない。また、中国人や日本人だけでなく、マライ・東インドの島々の船びとたちがつくつたであろう群島の地図についても、さらに探究を進める道はないものだろうか。すでにジャワのマジャパイット王国の勢力は群島にも及んだのであるし、またルソンらしい島がはじめて現われる Rodrigues の地図（一五一三ごろ）のようにジャワ人の地図を資料としたことがはつきりしているものさえもある。そしてそのような研究が、東アジアの多島海の地図的形成史に大きな寄与をするであろうことは明らかなのだ。暑熱の風土と冷酷な歴史が、それら土着の地図をほろぼしてしまつたとも考えられようが、またこれまでのヨーロッパ的視角のなかでは、それらは盲点となつてとらえがたかつたのではないかという気もするのである。

資料があるかないかもわからぬことに、こういうことをいいたてるのが無理難題だとわかつてはいるが、われわれの手にはとどきかねるこうした問題を、フィリピン人である著者に期待したく思うのは、私ひとりではないだろう。このすぐれた作品を提供された著者に感謝するとともに、さらに新しい分野を開いたみごとな労作が、ふたたびわれわれを喜ばせてくれる日を待ちのぞみたいものである。